

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

| | |
|------------|---|
| Title | 古城の晝：短歌 |
| Author(s) | 石丸，公 |
| Citation | 龍南， 2 5 3： 6 0 - 6 0 |
| Issue date | 1943-07-20 |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| URL | http://hdl.handle.net/2298/8546 |
| Right | |

短歌

文二ノ二 石丸 公

歩哨一人葉櫻の枝に見えかくれ古城の眞晝靜もり深し
針の目のほどにかなしき虫にしも命はありて晝の上を這ふ
夏の陽の晝をこがすこの眞晝往來に人の水撒く音す
疲るれば晝より離す眼のやり處陽光にさやぐ若葉やさしき
青柳のうつれる川面光りつつ低くすばやく夕燕飛ぶ

文二ノ四 室岡 美和

アツツの公報をきく

新聞のこれの報道はまことかも思つめて見る胸いたきまで
に

癪病院にて

夢あらぬ絶望の果にありて癪人らはこの日何に生きた
る

梅も櫻も青葉の色深き頃となり爆音はひと日耳をはなれず

犬を殺す(録十首)

食糧事情不如意の折柄醫大の友の實驗用に
と吾が家の犬を請ふままに、頃日、醫大へ
連れ行き、ストルキニーネと云ふ劇薬にて

實驗後、解剖に附す

雨後の夾竹桃のうすもいろつばらつばらに咲くは愛しき
實驗に殺す犬の瞳小さければ吾は悲しく歩み寄りけり
街上に大き黒犬臥りゐて吾が犬行けば起ちて嗅ぎけり
見馴れたる病院橋は長くしてあめあとの濁漲ちたぎちゆく
高所より白き光りの入るときしづかなる研究室に友は住
みをり
足裏の蹙の冷たさを感じつつ死體解剖室の廊を急ぎぬ
背に迫る注射針に駭く吾が犬を吾はおさへをりしづごころ
もなく

息笛に光る鉄の立てられて粘る黒血は轉び出にける
おともなく腸は光りて蠕動けり夕日ほのかに射せる窓邊に
ガソリンの匂ひ細ぼそ流れたり灯の點きそめし街衢を戻る
に

俳句

無電塔

文一ノ四 木庭 立夫

發車のベル、靜かにすべり出る東京ゆき列車、霜